

信と非信の構造

広瀬一隆*

1 はじめに

わたしは10代の頃からずっと、「神を信じる」とはなにかと考えてきた。そしてその答えが未だにわからない。

たっただいま書いたばかりの自分の言葉を前にして、居心地の悪い思いがこみ上げる。ふだん記者として取材している社会的なテーマからすれば、いうもはばかられるような問いである。だがやはりわたしにとっては、「自分の人生と切り離せない」といってもいいくらい、年季の入ったテーマなのも事実だ。

結論めいたことを先にいえば、わたしにとっては「神はいない」と信じることこそ「信」ではないか、という思いがある。神への信仰を重んじる宗教の立場からすれば、逆向きのベクトルに映るかもしれないが、わたしは「神はいない」という前提に立つことこそ、大きな信の力が必要だと感じている。

自分の問題意識が大きな意味をもつとはもとより考えていない。だが多くの宗教でなぜ、「神は存在する」と信じる方向へドライブをかけているのかがわからない。その疑問をできる限り明確にしようというのが、本稿の目的となる。

2 神をめぐる個人的経験

「神を信じる」とはなにか、という問いを抱えつづけてきたと書いた。大袈裟に聞こえるかもしれないが、わたしが覚えているもっとも古い夢は「神をみた」というものである。

今でもありありと脳裏に浮かぶが、それは赤銅色をした三つの顔が並んでいるビジョンだった。特に言葉を介したやり取りがあったわけではなく、ただの映像なのだが、なぜかずっと覚えている。たぶん3歳かそこらでみたのだと思うが、「ああ、神さまっているんやな」という直観を得たのだった。

おそらくどこかの寺に連れて行かれてみた仏像が、頭にこびりついていて夢

* 京都新聞記者

電子メール: theshelteringsky89[at]gmail.com

¹ なお本稿では「わたし」の表記は3種類ある。広瀬一隆個人を指す場合は「わたし」、一般的な一人称としては「私」、さらにのちに登場する哲学者の永井均の独特の用語としての<私>である。<私>の意味については、永井の著書を取り上げる際に説明する。

に出てきたのだろうと思う。仏を神と読み換えるのは、いかにも日本の風土らしいといえはいえるかもしれない。

そうはいっても、幼いわたしにはそのような「説明」は関係ない。神の存在を前提として人生ははじまったのである。

・・・といっても、平凡な幼少期だったのはまちがいない。親に連れられて寺社へ行けば皆と同じように手を合わせて、なんとなく「お祈り」をしているだけのごくありきたりな「信仰生活」だった。

ただ3、4歳頃のいつとき、ささやかな「倒錯」を味わう癖があった。周りの大人に声を掛けられたときに笑顔を返しながらか、こころの中で「おっちゃんはおほや」と敢えてつぶやき、「こんなことを思う僕って悪いやつや」と戦くのである。誰にも知られないこころの中で、自らの悪をなすことに戦くという「倒錯」は、幼いながらも自分を罰する神を意識していた証左といえなくもない。

とはいえ、幼少時を振り返って、ほかの子どもと違う癖があったと思ひ浮かぶのはこれくらいである。親族のなかになんらかの信仰に篤い人もいなかったもので、特に深く神について思いわずらうでもなく成長していった²。

わたしが決定的に神の存在を意識したのは、高校生の頃だった。当時のわたしは、家庭の問題を抱えていたこともあって、強迫神経症のような状態に陥っていた。

きっかけは読書をしているとき、ページの端にあるページ数を記した数字が気になって仕方なくなったことだった。それまでは、熱中して読書しているときにはページ端の数字など目に入らなかったはずなのだが、どうすればそのような熱中した状態になるのかが突然わからなくなった。そしてそれを気にしだすと、逆にページ端の数字ばかりが目に入ってしまふようになった。

こうした症状はさらに広がり、視界に入る赤い傘など、ちょっとした目立つものに注意がそがれて神経に障るようになった。ほかの人にとっては、なんとも理解しづらい症状だろうが、わたしには非常に不快で切実な症状だった。

症状を治そうとして、「気にしないでおこらう」と意思すればするほど、逆に視界の端にある数字や物が気になった。自分自身の感覚の問題であるにもかかわらず、自分の意思ではどうにもならない。

そんな症状に悩まされるなか、自分を超越した存在である神があらためて身に迫ってくるようになった。神のような超越者がいるからこそ「わたしの思い通りにならないわたしのこころ」があるのだ。

そうした不安定な精神状況だったある日のことだ。満員電車の車窓から、いつもと同じように青空の下に広がる大阪の街を眺めていたとき、突然直観が浮

² なお幼少時から、幽霊を「みた」経験は何度もある。そうした背景から物質世界とは異なる領域の存在は、一定のリアリティーをもって感じている。

かんだ。

「この景色に神からのメッセージがあって、僕はそれを読み落とし、取り返しをつかない過ちをおかしたのではないか」。

今となっては、「病的」といえる思い込みだが、当時のわたしには動かしがたい直観だった。この直観を得たとき、全身に鳥肌が立ったのを覚えている。

これは「啓示」とすらいいいい体験だった。それもとびきり、マイナスの意味をもった・・・。

なにが神の意思なのか、わたしにはわからない。だがたとえわたしにとって読み取ることが不可能なメッセージであったとしても、それを読み落としたことによって神から罰を与えられるかもしれないのである。

わたしは、この啓示を通して「自分では意思していないにもかかわらず、神からすれば絶対に許されない行為をしてしまう恐れ」を強く感じるようになった。

この恐れから逃れることは不可能だ。目の前のコップを手にとること、あるいは何も行動を起こさないこと、さらには神に祈ることのいずれもが、神の怒りに触れこれ以上ない悪とされる可能性は否定できないのである。

自殺を選んだとしても同じだ。自殺した後にはどのような世界が待っているのかは誰にもわからない。「無」なのかもしれないし、そうでないかもしれない。自殺した後もなんらかの形でわたしは存在しつづけ、そのさきに神の怒りが待ち受けている可能性は否定できない。

自殺を含めたどんなことも許されない存在。この世界に存在することは、このような罪の可能性を背負い込んでいるという事実を身震いするように実感した。

このような感覚を抱くに至って、神という存在がわたしにとっては逃れられない切実な問題となった。わたしにとって神とは、信じる対象ですらなく、ハナからありありした存在感を伴って内面を掘り崩してくるなにかだった。

わたし自身の存在意義を無限に小さなものにし、理不尽に罰する可能性がある神を前にしたとき、どうすればよいのか。それが大きな問題としてせり上がってきたのだった。

3 神とわたし

高校生の頃の体験が原点となって、わたしは哲学書や宗教書を読み漁った。だが神をめぐる議論と「信仰」がどうしても結びつかなかった。わたしにとって神はあまりに自明な存在であり、そもそも信仰するような対象とは思えなかったからである。

わたしよりも圧倒的な存在感をもち、わたしの内側から脅かすような神からどうやって自由になるのか。それこそが切実な問題であった。

わたしが神から自由になるには、まず、「わたし」とはどのような存在なのかと問う必要がある。神を前にした「わたし」は、ひょっとしたら存在しないのかもしれない。だとすれば、わたしの考えてきた恐怖もまぼろしとして消えるかもしれないのだ。

「私とはなにか」という問題に対する考察は古くから数多ある。議論の系譜をたどることはわたしの手に余るが、ここではルネ・デカルトの『省察』と永井均の『私・今・そして神』という二つの著作を参照しながら、ほんとうにわたしは確固とした存在なのか、ということを検討したい。

2人がそれぞれの思索の対象に据えた「私」という存在は、同じ「私」という言葉で表現されながら実は微妙に異なるものである。ただ共通しているのは、いずれの著作でも、思索の対象とした「私」という存在を神との関係で描き出していることだ。

4 デカルトが刻み出す「私」

デカルトは、主著のひとつである『省察』において神と私の関係を考えた。そのなかで、神と私の関係をクリアに示したのはつぎの一節だろう。

何か最高に有能で狡猾な欺き手がいて、私を常に欺こうと工夫をこらしている。それでも、かれが私を欺くなら、疑いもなく私もまた存在するのである。できるかぎり私を欺くがよい。しかし、私が何ものであると考えている間は、かれは、私を何ものでもないようにすることは、けっしてできないだろう。³

あまりに有名な文章だが、ここから「私」という存在を欺こうとする超越的存在を読み取ることができる。この箇所において、デカルトは「欺く神」という言葉をつかっていないが、「最高に有能で狡猾な欺き手」を「欺く神」と読み取することは可能である。

その場合に重要となるのは、そうした「神」と対峙できる存在として「私」を位置づけている点だ。わたしの問題意識に引きつけていえば、「神に脅かされる私」がいるとしても、「脅かされる対象」として「私」は神と対峙しているということになる。

たとえ「私」が見聞きしている世界が、「欺く神」によって虚構されたものだ

³ デカルト [2006] , 44-45 頁

としても、なんらかを「感覚している私」の存在自体は疑うことができないのである。「欺く神」であったとしても「欺かれる私」まで否定しては、欺くことすらできなくなってしまう。

デカルトは、「神」ですら侵すことのできない「私」の領域を刻み出す。

しかしほんとうに神に侵されない私の領域はあるのだろうか。つぎに、永井均の『私・今・そして神』を読み解きながらその問題を別角度から考えてみたい。

5 永井均の〈私〉

永井は長年、〈私〉をテーマに思索をつづけている。永井は〈私〉という存在の考察を深めることによって、デカルトの語った「私」をさらに精緻にし、その結果、神のあらたな一面を見いだしたといえる。

永井の哲学に関するわたしの理解を述べると以下のようなになる。

世界には、たくさんの「私」が存在しているが、それぞれの「私」は隔絶されている。いわばバラバラの存在だ。そうしたなかで、世界にたくさんいるはずの「私」のうちたった一人わたし（広瀬）のこの身体だけが、痛みを覚えたり時間の流れを感じたりする。なぜかはわからないが、意識を「実感」することができるのだ。この世界にひとつしかない、痛みや時間を感じられる「私」、それが〈私〉である。

デカルトも、世界にたった一人しかいない〈私〉（この場合はデカルト）について語っていたとみることができる。しかしデカルトは〈私〉がどのような存在様式にあるのか、追求することはしなかったようだ。〈私〉は世界にたった一人しかいないもかわらず、なぜかデカルトの言葉は広く伝わってしまう。世界にあまたいる「私」のなかに〈私〉はどうしているのか。その不思議さをデカルトが深めていったわけではない。

その点、永井の議論はデカルトの議論を別の角度から広げているとみなすことができる。そしてそのさきに、デカルトのいう「欺く神」とは異なった神の位相をみいだしている。

永井が神について語った文章には次のようなものがある。

通常のオーダーの低い神では、世界の中にそもそも私が存在するかどうか、かりに存在するとして、どれが私であるか、識別する能力がない。神はただすべての人の心をお見通しなだけである。すべての人の心を見通したって、そのうちのどれが私であるかはわからない。識別能力がないのだから、神はもちろん私を創造する能力もない。ある特定の性質を

もったある特定の人間を造れるだけである。私が生じるのは神の手の及ばない偶然である（デカルトの「我」が「欺く神」に対抗できるのはそれゆえである）

だからもし、神に私を創造する能力があるとするれば、ふつうの神より高階の神を考えなければならない。心を持った人間が複数存在する世界を（主として物理的に）創造する神という神表象を捨てなければならない。どれが私であるかを含み込んだ世界をつくる神を考えなければならない。⁴（傍点は永井）

永井はここで、「私」をもった人間が数多いる世界を創造する神（オーダーの低い神）と、世界に数多存在する「私」のなかからたった一人の〈私〉を創造する高階の神を分けて考えている。

仮に世界に、ありありと自分の意識の实在を感じられる〈私〉が存在せずに、「私」たちだけしかいなかったとしても、世界は実質的にはなにも変わらない。太陽は上り、動植物は繁殖をつづけ、人類の社会もなにも変わらずに営まれるだろう。

世界の創造は〈私〉抜きでも可能なのである。ただし、それにもかかわらずなぜか〈私〉という存在はいる。わたしの視点からいえば、広瀬一隆という身体から開かれる世界を認識する〈私〉が、そのほか無数とっていいほど存在する（した）「私」たちとともに共存しているのである。

永井の文脈に乗れば、デカルトが対峙した「欺く神」は「オーダーの低い神」ということがいえる。この神は、世界の中のどこに〈私〉がいるのかを理解することはできない。共通世界に〈私〉の存在する余地はないからだ。だからこそ、どれだけ偽りに満ちた世界を創造しようとも、〈私〉の領域にまでは踏み込んでこられないのである。

しかし高階の神の場合、世界のなかのたった一人の〈私〉を作り出すことができる上、消し去ることもできる。デカルトの神と私の関係とは異なり、〈私〉に対する神の優位性ははっきりしている。その意味で、〈私〉の存在を脅かす可能性を孕んだ神ということ是可以する。

永井はつぎのように述べる。

たしかにいま、私は永井均である。ということはつまり、永井均から開かれている（彼を開闢とする）世界が唯一のリアルな世界として存在し

⁴ 永井 [2004] , 66 頁

ているという意味である。なぜよりによってそいつなのかは知らないが、なぜかそうなのだから、神の思し召しとあきらめよう。ところが、われわれの神は、その思し召しをこれから変えることができるのだ。いまから私はたとえばブッシュ大統領になるのだ。ここで私がブッシュ大統領である状態とは、ブッシュ大統領から開かれている（彼を開闢とする）世界が唯一のリアルな世界として存在する状態を意味する。そうなったとして、われわれの共通世界の中で変化することは何もない。私であるブッシュ大統領は相変わらず好戦的だろう。⁵（傍点は永井）

<私>がどの「私」に当たるのかは、共通世界の中では区別することはできない。できるのは<私>の当事者か高階の神だけである、というのが永井の立場だ。そして高階の神は、<私>を自在に変更することができるという意味で、<私>への優位性ももっているのである。

永井は、デカルトよりもさらに<私>について考察を深めた結果、よりレベルの高い神の存在も見いだせたということになる。

永井の語る神において重要なのは、たとえ高階の神が<私>の逢着する身体を自在に変えられ、場合によっては消し去ることができるとしても、その<私>の感じるリアリティーそのものまでは侵食できないとみられる点である⁶。

<私>が存在している限り、そこにあるリアリティーを否定することは高階の神ですらできない。この点は、デカルトが欺く神を相手に論証したことがそのままあてはまる。

人生の記憶や思考、感性などといったものはいずれも交換可能とみなされるにもかかわらずただ一点、どんな内容にも「今、この身体で起こっている」という現実感が伴っていることだけは<私>から拭いされないのである。

この点で<私>の領域は、高階の神とすら拮抗しうるのである。

6 神に脅かされるわたし

⁵ 同上, 81-82 頁

⁶ <私>の身体に伴う感覚のリアリティーすら存在しないと疑う立場もある。アニメ『GHOST IN THE SHELL—攻殻機動隊』（1995年 押井守監督）では全身サイボーグの主人公・草薙素子が次のように語る場面がある。「もしかしたら自分とはとっくの昔に死んじゃってて、今の自分は電脳と義体で構成された模擬人格なんじゃないか。いや、そもそもはじめから、わたしなんてものは存在しなかったんじゃないかって」。この草薙の言葉は一見デカルトの懐疑と似ているが、微妙に違うように思える。草薙は<私>であることの唯一の根拠である「リアリティー」を懐疑していると捉えられるのである。わたしには非常に興味深い問いだが、本稿の議論からは逸れてしまうので別の機会に考えてみたい。

さて、デカルトと永井の思索を通して神と対峙するわたしの関係性があきらかになった。あらためて説明すれば、神はわたしを自在に欺くことができる。さらにわたしの逢着している身体も、時間や場所を問わず自由に変えることができる（ただし、わたしはその変化に気づくことはない）。消去することすらできるが、その時は文字通り「無」に帰するだけだ。わたしが〈私〉である限り、神と対峙することは可能なのである。

だがここまで至ると〈私〉の内実は限りなく空虚となる。神と対峙するわたしの存在は非常に心細いものである。まるで自由に殴られるサンドバッグのようだ。神の意思を受け入れる器としてだけ、わたしという存在はあるようにすら思えてくる。

このような、圧倒的に偉大な神を前にしたとき、人間はどのように存在することができるのか。ジャック・デリダの『死を与える』には、つぎのような一節がある。

私たちがおそれ、おののくのは、すでに神の手の中にいるからであり、自由に働き勤めることができるにもかかわらず、見ることができない神の手の中にいて、その視線にさらされているからである。私たちは神の意志も、下されるべき決断も知ることができないし、あることを欲する理由や根拠も、私たちの生も死も、私たちの破滅も救いも知ることができない。私たちは、私たちのために決断を下すような神の、接近不可能な秘密を前におそれおののく。にもかかわらず私たちには責任がある。つまり、自由に決定を下し、勤め、みずからの生と死を引き受けることができるのだ。⁷

ここにはまさに、わたしが神に対して感じてきた戦慄に関する記述がある。わたしから神をみることは叶わないにもかかわらず、ありありと神からの視線を感じる。その非対称性が、わたしを戦かせたのであった。

だがわたしには、ただ恐れ戦くことしかできないのだろうか。

デリダは旧約聖書の『創世記』を引きながら、理不尽な神を前にした人間の生き方について考察する。そこで語られるのは、アブラハムが息子のイサクを殺して神への犠牲にするよう命じられるエピソードである。

アブラハムとイサクの挿話は次のような内容だ。

ある日アブラハムは神から、イサクを神への捧げものとするよう告げられる。イサクら家族にはそのことを伝えないまま、アブラハムは神のいうままにイサクを殺害しようとする。そして刃物をとってまさに屠ろうとした瞬間、「神を畏

⁷ デリダ [2004] , 118 頁

れるおまえの心がわかった」と神から告げられ、殺害を止めるよう命じられるのである。⁸

なぜ神がアブラハムにイサクの殺害を命じたのか。それはわからない。デリダは解説する。

この隠された神が、おのれの根拠や道理を明かすことなく、アブラハムに対して、このうえなく残酷かつ不可能で、もっとも支持しがたい行為を要求することを決断する。それは息子イサクを犠牲に捧げるという行為である。これらすべてのことは秘密裡に起きる。神はおのれの根拠について沈黙を守り、アブラハムもまた沈黙を守る。⁹

神は、理不尽な罰をアブラハムに与えようとする。アブラハムは、なぜそうしなければわからないにもかかわらず、黙って従う。しかし同時に、アブラハムはイサクを殺したくないと願っている。

アブラハムは息子を愛しており、神が何も彼に要求しなければよかったと思っている。彼にとっては、神がアブラハムのするままだにさせず、腕を止めてくれ、燔祭の子羊を備えてくれたほうがよい。犠牲が受け入れられてしまったあとで、決断という狂気の瞬間が非—犠牲のほうに傾いてくれたほうがよい。彼はそうしないことを決断しないだろう、彼は〔そうする〕ことを決断する——でもそうしないほうがよい。¹⁰ (傍点デリダ、〔 〕は訳者)

みずからの思いと裏腹であるにもかかわらず、アブラハムは神のもとにに応じ、その行為をなそうと意思する。そしてそのさきに、あらたな次元がひらける。

まさにこの息子の命を断念することによって、アブラハムは勝利する。彼は勝利するという危険を冒すのだ。さらに正確に言うならば、勝利することを断念し、応答も報奨も、彼に返されるべきもの、彼に戻ってくる〔＝彼に帰属する〕ようなものは何も期待しないことによって（私はかつて散種を「父に戻ってこないもの」と定義したが、そのときにアブラハム的な断念の瞬間を描き出すこともできただろう）、アブラハムはこ

⁸ 『旧約聖書』（中公クラシックス）を参照した。

⁹ デリダ [2004] , 121 頁

¹⁰ 同 156-157 頁

の絶対的な断念の瞬間に、神から息子を返してもらおう。まさに同じ瞬間に、犠牲にしようとするすでに心に決めていた息子を返してもらおうのだ。¹¹(傍点はデリダ。ただし〔 〕内は訳者)

利害を計算するような思考を度外視したときにアブラハムにもたらされたもの(イサクの命)こそ、神からの「贈与」だというのである。「ギブ・アンド・テイク」といった経済のシステムを越えて、贈与がもたらされるのである。

絶対的な他者との関係において、みずからを放棄したようなときに得られる贈与。それこそがアブラハムとイサクの挿話から導き出される神と人間の間関係だと、デリダはいう。

確かに神という超越者、絶対的な他者からメッセージを受け取った場合、アブラハムのようにしか振る舞えないのかもしれない。

だが、やはりわたしには同じ道を進むことはできない。

わたしが神を考えるきっかけとなった経験と、アブラハムの挿話には違いがある。アブラハムがイサクという他者の犠牲を神から強いられたのに対して、わたしの場合は自分自身の存在自体が神によって切り崩されようとするという点である。

アブラハムが神に従ってイサクの殺害を決断したように、わたしは自殺を選ぶとすればよいのだろうか。しかしさきに触れたように、わたしの問題では、自殺や無為を含めたあらゆる行為が神から罰せられるのではないか、という「不安」こそ本質だった。自殺すら罰せられるという強烈な不安を突き詰めることは、自殺を選ぶということではない。

アブラハムのように、ある限定された他者への行為を神から命じられたのではなく、神と不可分な「存在を切り崩される不安」に晒されたわたしはどこへ向かえばよいのか。

ただ一つしか道はないように思える。

「神の否定」を信仰することだ。

7 信と非信の構造

アブラハムは神の命じるままに愛する者を殺そうとした。わたしは神のメッセージを受け取ろうとして、自身の存在をどんどん切り崩していった。アブラハムもわたしも、神と対峙しながらも圧倒的な非対称性に晒されつづけた点で共通している。

アブラハムがまさにイサクを殺そうとしたとき、神は命令を撤回して殺害を

¹¹ 同 197 頁

止めたのだが、アブラハムはイサクを殺害しようとして結局どうしてもイサクを殺害できなかったとみることもできる。刃物を手にもつても、やはりできなかったのだ。

わたしの場合も、神を前にした不安を徹底してわたしという存在を掘り崩そうとしても、わたし自身を否定しきけることはできなかった。どんなに弱々しくサンドバッグのような存在であったとしても、やはり否定しきれないのである。

アブラハムには、息子を殺すか否かという葛藤があった。その葛藤が頂点に達したとき、神が命令を撤回した。

わたしの葛藤は煎じ詰めれば、わたしを消し去るか、不安を与える神を否定するかということになる。わたしの存在を否定しきれないのだとすれば、残るは神の否定しか残っていない。わたしに押し寄せる不安は、神の存在と不可分なことから。

両者の関係はパラレルである。アブラハムもわたしも神の意思によって葛藤する状況に置かれた結果、葛藤をもたらした神に由来する条件が否定されるのである。

だとすれば、アブラハムの行為が「信」として認められるのと同じように、わたしが存在の不安を突き詰めて神を否定するに至ることも「信」と認められなければならないのではないだろうか。

わたしが神の視線に震撼してから、神について考えてきた末、現状ではこのように考えている。

冒頭に述べたように、わたしには神の存在は自明であった。目の前のパソコンやキーボードを打つ自分の手よりも、さらに明晰判明な存在であった。そうした世界観から思わぬ形で神を否定する次元に移行する場合、そこには無神論者が神の信仰に入るときと同じような「信」の力がはたらいているのではないか。

神を否定するのは、一般的には「非信」として理解されるだろう。しかしわたしには神に対する「信」と「非信」は、同じ存在形式の裏表に思える。

宗教の多くは、神の存在を「信じる」ことこそが信仰だという立場であろう。だが、神の存在を「信じない」ということにも、信仰と同じ構造が孕まれているのである。

わたしは、こうした「信/非信」の構造をつかみ出すことによって、あらたな宗教の形があり得ると思っている。宗教の信仰者と非信仰者のあいだに掘られていると思えた溝は、実はなかったといえるかもしれない。

「神を否定する」という道をえらんださきに、どのような世界があるのか。それについては今後の思索を通して示していきたい。

参考文献

- 『旧約聖書』 中沢洽樹訳 2004年 中公クラシックス
ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳 2006年 ちくま学芸文庫
ジャック・デリダ『死を与える』廣瀬浩司／林好雄訳 2004年 ちくま学芸文庫
永井均『私・今・そして神 ― 開闢の哲学』 2004年 講談社現代新書